新作痛快推理

岩崎警視シリーズIV

新・翔んでる警視IV

胡桃沢耕史

kosaido blue books

新・翔んでる警視 Ⅳ

KOSAIDO BLUE BOOKS

著　者　胡桃沢耕史

発行者　足立貫一

発行所　廣済堂出版
〒105
東京都港区芝2-23-13
電話　03-453-1201㈹
振替　東京8 164137番

印刷所　株式会社 廣済堂

ISBN4-331-05199-4 C0293
©1985　胡桃沢耕史

定価は、カバーに明示してあります。
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

新・翔んでる警視 IV

胡桃沢耕史

KOSAIDO BLUE BOOKS

KOSAIDO BLUE BOOKS 需要完整PDF请访问：www.ertong

目次

PART Ⅰ	警視出動せず	7
PART Ⅱ	パーフェクトなパフォーマンス殺人	48
PART Ⅲ	二人のシンを探せ	90
PART Ⅳ	翔んでる新婚旅行	131
PART Ⅴ	犯人アリバイに死す	197
PART Ⅵ	青春の終りの日に	239

PART I 警視出動せず

〈指紋について A〉

天は人間に、指紋をあたえ、いかなる人間も個々に識別できるようにした。これはまさに、自然界をつかさどる神のみができうる仕事であると言われている。

世界中、四十八億人を越す人間の中で同じ指紋を持っている者は一人もいないのである。

あらかじめ指紋さえ一定法則による数値で登録されていれば、顔や体が完全に破壊されていても、その人が生前どんな人間で誰であったか、即座に識別できる。

ただし以前はそれを分類し、その一つを抽出するのに、かなり時間がかかったが、コンピュータが発達した現在、日本中の犯罪者の登録されている指紋を照合するのに、一千万人のなかからでも、二、三秒でできるようになっている。

指紋をまず定義すると『指紋とは、手指末節の掌面にある、乳頭隆線の紋理をいう。弓状紋(きゅうじょうもん)と、蹄(てい)

状紋、渦状紋との三種に大別される』ということになっている。
要するに、特に人間がそれを見せるためにわざわざ衣服を脱ぐ必要のない便利な指先にあり、無意識のうちに付けてしまうものが、個人識別の最も重要な証拠になるのだから、これが捜査にとってはなくてはならない大事なものであるのは当然である。

1

五階建てのマンションまでは、エレベーターを付けなくても建築法規上はいいことになっている。それによって建築費はうんと節約できる。
それでこれまで普通の商店があったところや、木造アパートだったところをつぶして建てたマンションは、殆どこのエレベーターのない五階建てである。
もともと小さな土地に無理して建てたためこういうマンションは、一ＤＫスタイルが多く、六畳一間に、キッチンが付いた形式だがコンクリート住宅の常として、必ず狭いながらもバストイレだけは付いている。大体は水商売の女が、少し金をためてせめて贅沢な気分だけでも味わおうと思って入るのが多い。この種の建物のもう一つの特徴は階段がひどく狭く急なことだ。
パトカーで現場へ着いたばかりの岩崎班は、その狭い階段を五階まであがって行った。
すぐ横が、新宿から来た甲州街道と、環状七号線が交差する、通称・大原交差点だ。
そこは日本一、大型車の交通量が多く、車からの排気ガスが濃い。そのため空気が汚染されて、有

名な大原喘息の発生地になっている。

四階まであがっても、車の音はうるさく響く。

何度も曲って五階に着いた。

進藤も志村も乃木も、息一つ切らさずのぼりきったのは、まだ若いし、ふだんの訓練のせいだが、さすがに老体の吉田刑事は息切れがしている。

事件としては単純だ。

マンションの入口に新聞が二日分もたまっていて、中から取られた気配がない。一階の管理人がそういえば二日ばかり、中の居住者の姿を見ていない。それで扉を叩いても返事がないので、合鍵であけてみると、ベッドの上で借り主の女が一人で仰向けになって死んでいた。

首に、女物のスカーフが巻き付けられていた。だから誰かに殺されたのは明らかである。

中から鍵がかかっているのを見ると、外から入った泥棒や何かでなく、彼女の鍵を取って出たか、合鍵をもらっているような、顔見知りであろう。

所轄署からすぐ出動要請が出て、ちょうど、二班の岩崎班の番だったので、こうしていつもの殺しの係が、飛び出して来た。

既に所轄署、捜査課の刑事によって、大体の報告は入っている。その第一報によれば、たとえ殺人といっても、それほどの事件とは思われない。

志村は一一〇番指令室から伝えて来た報告を聞くと、独断でそう判断して岩崎警視に自分から申告

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

した。
「これはきっと、嫉妬か怨恨、金銭の貸借関係を含んだ問題などで、女がその情夫に殺されたという、ごく単純なケースです。警視殿がわざわざ出かけるほどのことはないと思います」
それに対しては別に返事をせず、
「ああごくろう」
岩崎は机の上の分厚い原書に目を通したままで言った。一体、今の志村の言葉を聞いていたのかどうか、頼りない。
志村の方は張り切っていた。
せっかく警部補になり、捜査指揮を取ることもできるまでの階級になったのだから、ここで一つ、岩崎の力は借りずに、自分だけでこの事件を解決したいと思っていた。それでなくては、婚期を犠牲にして、三十すぎまで警察の仕事一筋に生きてきた意味もない。
心の中では以前は、警察をやめて岩崎警視にお嫁にもらってもらえるかもしれないと思ったのが、ばかみたいと、今では全くその思いを念頭から払って、仕事一途に生き抜き、一生を殺人犯逮捕に力を尽そうと考えている。つい先日、故郷の父母にも思い切って、『結婚や孫のことは諦めてください』と手紙を書いて出してしまったばかりであった。だから今日は、いっそう、事件に対する意気ごみも違うのだ。松原と表札の出た扉の前で、張り番に立っていた所轄の代田橋署の巡査が、本庁からの、殺人課の女性警部補の姿にこちこちになって敬礼した。

まず志村と乃木が中へ入り、続いて進藤と吉田が入って、ベッドの回りを囲んだ。
ベッドの枕元に、縫いぐるみの人形が五、六個置いてあり、まるで女子高生の部屋のようだ。
そこに発見されたままの状態で女性の体が横たわっている。顔はあどけなく年も若い。
上半身には薄い小さな乳房、肩や胸も、骨がむき出しで見えるぐらい肉が薄い。たぶん間違いなく夜の世界に生きていることは、若いわりに、皮膚やほおに輝きがないのでよく分かった。
腰だけは大きかった。秘毛も、顔だちや体付きがあどけなく見えるわりには、たくましく繁茂(はんも)していて、かなりの経験者に見える。
「検死官の検証はどうなっていますか」
すると所轄の刑事が、姿勢を正して答えた。
「同時に要請して、ほどなく到着すると思いますが、とりあえず現場をこのままにしておくことが肝腎と思いまして、本庁一課の到着までは誰も入れないよう、厳重に命令しておきました」
「ごくろうさんでした」
死体からかすかな死臭がもう匂って来ている。顔があどけないだけにかわいそうであった。
所持品、荷物、着衣のポケットなどの詳細な検査が行なわれた。
ついに彼女の身もとを示す物は何一つ出て来ない。故郷からの手紙、通勤定期、店での名刺、それらが全く見かけられない。小箱などにも、名前を書いた紙片などは、どこにも入ってなかった。
乃木が階段を下りてアパートの管理人に、申込時の住所などを聞いたが、ただ新宿の喫茶店に勤め

ているというだけで、管理人も敷金と家賃さえきちんと入れてくれれば、何もそれ以上はくわしく調べようとしないらしい。ただ名前だけは分かった。

ここにこの東京という大都会で、完全に周囲から離れて孤立して暮している女の姿があった。松原美佐子。二十一歳。

志村はハンドバッグの中を、白手袋をはめて、慎重に調べているうちに、中の小さな物入れ用のジッパーをひくと、名刺が三枚入っているのが見つかった。

男のものだった。

一人は会社員、一人は商店主、一人は歯科医師のものだった。

「結局、この三人に事情を聞き、同時に、アリバイを聞く以外はないわね」

そう志村は言った。

これしか証拠に残されたものはない。上司の岩崎警視と違い、天才的な推理力がないのだから、このたった一つの証拠品をたどって、ひたすら地道に追いつめて行く以外はないと思い、もう一つ大事なもののことを忘れてしまった。

〈指紋について　B〉

弓状紋は、隆線が左側または右側から、反対側に向かって走る弓状線によって形成されている。

普通弓状線と、突起弓状線との二種に分けられている。分類計算に際して、これを指紋置1とする。

蹄状紋は、隆線が斜め上方に向かって走り、再びひき返して元の方向に逆流する蹄状線によって形成されている。

甲種蹄状紋と、乙種蹄状紋の二種に分けられている。

甲種蹄状紋は、蹄状線が、母指側から起こり母指側に終わる蹄状紋であり、これを指紋置2とする。

乙種蹄状紋は、蹄状紋が小指側から起こり、小指側に終わる蹄状紋である。

内端と外端との間にある隆線数によって、四種類に分けられ、数値上の指紋置も、3から6までに分けて、分類し、コンピュータにインプットしておく。

渦紋状は一回以上、円または楕円形を描いて、起点に合一しない渦状線によって、二個以上の三角島を持つ指紋である。

追跡線には、上流、中流、下流の三種類がある。やはりコンピュータのインプット上の指紋数値を出す必要上、7から始まって、8、9の三つの数値を、形によって、それぞれ指定している。

2

死体を大塚の監察医務院に送り、正式な殺人事件として捜査に従事することに決め、女の着衣やハンドバッグ、絞殺に使ったスカーフなどを領置品(りょうちひん)として、パトカーに積んで本庁へ戻って来た。

進藤が、名刺の三人に電話をそれぞれかけた。一応は最初は丁重な言葉であった。

「ちょっと名刺のことでお訊ねしたいことがあるので、おいでいただきたいのですが」
初めにかけたのは村田という会社員であった。勤務中らしく、憤然として言った。
「一体、あなたは誰ですか」
仕方なく進藤は答えた。
「警視庁の捜査一課です。松原美佐子さんのことでお聞きしたいことがありますので……」
できるだけ、穏やかに、相手を刺激しないように言ったつもりだったが、さすがにシーンと黙りこんでしまった。
「松原美佐子がどうかしたのですか。何か事件でも起こしたのですか」
「それはまあー、来ていただいてからゆっくり、お話することにしましょう。ただこの呼び出しは、参考人としての事情聴取ということです。今日の午後五時ごろ、少し会社を早退して来てもらえばいいので、一応これは扱いは任意出頭となっています。しかしこの時間においでにならないと、任意出頭に応じなかったということで逮捕状が執行され、パトカーがお出迎えにあがり、手錠付きで乗っていただくことになります。今は地下鉄ができまして、本庁の真下に駅がありまして、何かと便利になっておりますので、ぜひともおいでくださるようにお待ちしております」
「わ、わかりました」
いくら静かに丁寧にしゃべっても、もともと本庁の殺人課で二十年近く勤務しておれば、自然、凄味が備わってくる。顔を見たらもちろんであるが、声だけ聞いても、何となくいやーな気分がしてく

る。会社員の方は電話口の向こうで明らかに動揺しているのが分かる。
あんまり脅かして逃亡や自殺でもされたら後が厄介だ。
「なーに一時間か二時間か、お話を聞かせていただくだけで、ご心配はいりません。ではくれぐれも時間に遅れないようにお待ちしております」
そう優しい口調で言って、電話を切った。
次の経営者の田中は、何とか会社社長と名は付いていても、実は小さな個人経営の酒屋か、スーパーの、店主らしい。そしてどうもそばに夫人がいるらしく、最初にいきなり、進藤が、
「こちら本庁の捜一の者です。ちょっと松原美佐子さんという女性のことでお聞きしたいことがあるのですが」
と言ったとたんもう、
「ハッ、かしこまりました。只今、すぐにお届けに参ります。何時にお伺いしたらよろしゅうございましょうか」
まじめくさって答えた。家族のてまえ、何とか必死に取りつくろっている感じが分かる。
「では五時にお待ち申し上げております」
それ以上は言わずにあっさりと電話を切った。
この調子なら必ず来るということが分かっていたし、別に夫婦間の生活に水をさすのが目的でない。
次の歯科医師もすぐ電話に出た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong